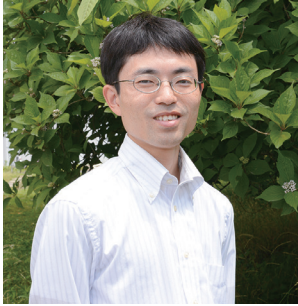


大人にはなかなか分かりづらい子どもの世界。前回に引き続き、発達心理学が専門の島義弘さんが今どきの子ども事情をひも解きます

大人に見えない 子どもの世界

Vol.15



鹿児島大学 教育学部
講師 島 義弘

【プロフィール】 埼玉県出身。名古屋大学大学院修了。2012年鹿児島大学に着任。専門は発達心理学・パーソナリティ心理学。現在 1 歳児の子育て中。34歳

今月の
テーマ

反抗期の「ヤダヤダ」は成長の証し

2歳が近づくころから、子どもは反抗期を迎えます。「○○しなさい」と言う、「ヤダ」。「じゃあ、△△は？」と言っても「それはヤダ(泣)」。もう好きにしなさい」と言う、「ヤダ(泣)」。困ったものです。こうした子どもの「反抗期」は親から見ると「困ったもの」ですが、子どもにとってはとても重要な時期なのです。

親の言うことをたいてい受け入れてくれます(着替えやおむつ替えのときに逃げ出すことはありませんが…)。それは子どもが親を自分の延長として考えているからなのです。子どもが自分と親は別々の存在であることに気がつくようになると、親が自分にしてくれらることを、させたいことと自分がしたいこと、親にしてもらいたいことが違つことも気付いてきます。

しかし、この時期の子どもはまだ十分に自分の気持ちを表現するだけの言葉も、それを上手に伝える術もありません。そこで、子どもたちが取る方法が「いやだ」と言うことなのです。

反抗期は子どもの中に自我が育ってきた証拠です。反抗期の子どもにはしっかりと自己主張をさせることが大切です。そして、子どもの主張と向き合い、受け止めてあげてください。しっかりと自己主張できた経験が、自分の思いを伝える力や必要となるときには我慢をする力を育てます。子どもは自己主張が受け止められる経験を通して自分自身や周囲の人に対する信頼感を形成し、他者を思いやる心を育んでいくのです。